

東洋文庫のアジア関連コレクション（特集 アジア 地域関連コレクション -- わが国主要図書館の所蔵 資料から）

著者	中善寺 慎
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	138
ページ	14-17
発行年	2007-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005278

特集／アジア地域関連コレクション—わが国主要図書館の所蔵資料から

東洋文庫のアジア関連コレクション

中善寺慎

東洋文庫は、大正一三（一九二四）年に三菱合資会社社長の岩崎久弥が、当時のアジア学興起の気運に应运えて創設した我が国最初のアジア学専門の研究図書館である。

東洋文庫の蔵書は、漢籍を含むアジア諸地域の歴史文献と欧文資料および和書とに三大別される。広くアジア全域を網羅するこれ程まとまった収集は世界的にもあまり例がなく、多くの貴重資料、貴重コレクションが含まれている。

創設の際に蔵書の根幹となったのは「モリソン文庫」と「岩崎文庫」である。

●モリソン文庫

モリソン文庫は、ジョージ・アーネスト・モリソンが二〇年かけてアジアに関する欧文の学術文献・資料を精選しながら系統的に集めた「アジア文庫」を、岩崎久弥が大正六（一九一七）年に一括購入したものである。約二万四〇〇〇冊に及ぶモリソン文庫のうち特徴的なものを挙げるならば、一七、一八世紀の中国滞在キリスト教宣教師の著作、一九世紀から二〇世紀初めにかけての中国の海関報告、イギリス議会の中

国に関する議会報告（ブルー・ブック）、義和団事変に関する各種資料、各国観戦武官の報告書を含む日露戦争関連資料、中国各地方語の辞書、東アジア関係の新聞・雑誌記事の切り抜き等を集めたモリソンパンフレットと称される一大資料群、そしてヨーロッパで刊行されたアジアの古地図と中国に関するエッチングを主とする絵画類などである。モリソン旧蔵書の日本将来は、当時の世界的大ニュースの一つになったという。

●岩崎文庫

岩崎文庫は、岩崎久弥が書誌目録学の大家である和田維四郎に委嘱して蒐集した資料に、和田没後の大正九（一九二〇）年、和田自身が蒐集した「雲村文庫」を合わせた上で、昭和六（一九三二）年までに財団に寄贈した和漢書約三万八〇〇〇冊である。和漢の稀観書が多く、平安期以後の古鈔本・古刊本、江戸・明治期の学者や文人の自筆本、江戸時代の文学・演劇・地理関係の資料が豊富である。国宝・重要文化財、中国の宋・元・明・清版の善本、朝鮮本（高

麗版、万暦以前刊本）なども含まれている。平成一八年現在の蔵書は約九二万冊を数える。ほぼ全てがアジア関連コレクションと言ってもよいこれら資料の全体像を、東洋文庫設立当初に蔵書の整備とその拡充に情熱をそそいだ石田幹之助の創案した書架分類法の順番で、地域別に概観してみたい。

●中国

モリソン文庫を中核とする中国本土に関する欧文図書は、第二次世界大戦によって洋書の輸入が困難になるまで収集を継続し、少なくとも中国については主要なものほとんどすべてを集めている。

漢籍は、岩崎文庫の稀観書を有するほか、実用書を系統的に揃えている。中国地方志三〇〇〇部、中国族譜八六〇部、清朝の方略・紳士録の揃い、数千点を数える拓本等を含んでいる。

その他、収集の内容をより豊富にしているものに、いくつかのまとまったコレクションの一括寄贈、または購入本がある。東西交渉史の研究者の藤田豊八旧蔵書と、横



特集／アジア地域関連コレクション—わが国主要図書館の所蔵資料から

浜正金銀行取締役であった小田切万寿之助旧蔵書は、それまで必ずしも十分でなかった一般漢籍の蔵書を一举に充実した。藤田文庫一七五〇余部は歴史関係、海事関係のものが特にすぐれ、小田切文庫一二五〇余部は詩集文集について完璧に近いものである。弘前の藤田豊三郎の蒐集による明清時代の文集等七〇余部、王国維手鈔手校詞曲書二五種も、特色ある個人コレクションである。

マイクロフィルムによって収集された米国議会図書館旧蔵北京図書館善本は、東洋文庫の所蔵する漢籍資料を質量共に戦後飛躍的に高めたものである。

同じく戦後マイクロフィルムで将来したアジューダ王宮図書館所蔵「アジアにおけるイエズス会士」文書も興味深い。これは、一六世紀の中頃から一八世紀の中頃に至る二〇〇年間の、インド・中国・日本で活躍したイエズス会士の書翰と各種報告との一大集成である。

アヘン戦争以後の中国に関する資料を集めた近代中国研究委員会収集資料は、東アジアの近・現代研究の基礎的資料群である。資料数は中国語約二万六二〇〇件、日本語約一万七〇〇〇件、欧米語約七八〇〇件にのぼる。汪兆銘政府の駐日大使館檔案など極めて貴重な原文書類も含まれている。

現代中国に関する資料は、平成一五年度研究部新体制により発足した超域アジア研究部門現代中国班が収集を続けており、蔵

書の拡充と再編をはかっている。

岩井大慧蒐集の東洋史関係書六〇〇余冊も、和書の蔵書の不足を補って見逃せない。梅原文庫は、東亜考古学者の梅原末治が生涯を通じて蒐集した日本・朝鮮・満洲・蒙古・中国に関する考古学資料数万点である。和漢書約二五〇〇部を含んでいるが、資料の中心は遺跡・遺物の実測図および写真等で、図書館資料としては異色のコレクションである。

●朝鮮

朝鮮本は、朝鮮総督府の通訳官の前間恭作氏旧蔵書八八〇余部、韓国政府学政参与官を経て台北帝国大学初代総長になった幣原坦氏の収蔵本三三〇余部を基礎にしている。いずれも戦前に寄贈を受けたもので、実用書本位の蔵書である。戦後はこれを拡充する形で、東洋文庫朝鮮史研究委員会の田川孝三が中心となって、朝鮮史、特に李朝後期の地方志を収集した。国内ばかりでなく、韓国、アメリカといった国外の研究機関からマイクロフィルムで収集した資料は、国内では質量共に有数のものといえる。

●満洲・蒙古

東洋文庫の満洲語文献の収集は世界でも有数のものであるが、その端緒は戦前の北京における和田清「満蒙史・中国政治史」の収集に始まる。官文書すなわち檔案類が多く含まれていることが特色である。戦後

は長く蔵書に変化は見られなかったが、近年になって清朝史研究者神田信夫の旧蔵満洲語関係資料が遺贈された。古籍にはきわめて良好な版本が多く、欧文書籍の殆どがフランス語の初期満洲学文献からなる。

●チベット

河口慧海将来の写本大蔵経をはじめとする各種のチベット大蔵経および蔵外文献、多田等観覧集の仏画（タンカ）類、他に例の少ないサキヤ派經典の系統的収集、戦後インドに亡命しているチベット人によって刊行されたおびただしいチベット語書籍群等は、東洋文庫のチベット資料コレクションを一層完璧にしている。本国チベットでもこれだけ豊富な書物が一堂に集められているところはない。近年受入れた北村甫旧蔵和洋チベット語資料は、中央アジア・チベット関係の語学研究書を中心に東洋文庫蔵書の欠を補うものである。

●中央アジア

護文庫は、東洋文庫のトルコ語資料収集を最初に手がけた護雅夫（トルコ民族史）旧蔵書で、内陸アジア史に関する欧文およびトルコ語資料七〇〇余冊からなる。

最近では中央アジア・ユーラシア・中国のトルコ系諸語の収集にも力を入れていて、既に一万点近くが収蔵されている。国内の研究機関の中にあつて質・量ともに充実した蔵書といえる。

和漢洋約三万冊よりなる榎文庫は、中央アジア史研究の榎一雄が幅広い学識と外国語を駆使して蒐めた東洋学関係の資料で、中央アジアのというよりは、ユーラシア全域にわたる資料群というべきものである。

敦煌に出土した五世紀から一一世紀までの文書群約六万点からなる敦煌文献は、英国図書館・フランス国立図書館・ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支所等それぞれの所蔵機関からマイクロフィルムで組織的網羅的に収集したものである。これにより東洋文庫は世界最大の敦煌文書研究センターとなった。

●東南アジア

東南アジアの欧文資料も、その根幹はモリソン文庫に由来する。これは、『タイムズ』記者モリソンの最初の赴任地がインドシナであったからで、のちに北京においてそうであったように、ここでも当地に関する欧文資料を精力的に蒐集していたことが資料への書入れなどから窺える。戦後は、モリソンの次男アラスデア・モリソンと、その夫人ヘダの蒐集した東南アジアに関する資料約六〇〇冊、亜細亜文化研究所旧蔵の一六世紀から二〇世紀のフィリピンを中心とする社会・歴史・宗教・経済・文学・民俗等の資料を蒐めたヴェラルデ文庫約四七〇余冊が寄贈され、東南アジア島嶼部の資料が補強された。モリソン二世文庫の過半はボルネオ（カリマンタン）に関する

文献が占めており、ボルネオに関してこれほどまとまった蔵書は稀であろう。

このほか戦前ハノイの駐仏印日本総領事であった永田安吉旧蔵越南本九〇余部と、これを補うフランス極東学院その他から将来した越南本のマイクロフィルム一〇〇余部、バンコクの実業家松田嘉久寄贈のタイ語書籍約一〇〇〇冊などは、東南アジア関係の収集について一つの特色を与えている。ビルマ史研究の先駆者荻原弘明旧蔵のビルマ関係を中心とするコレクションは欧文文献およびビルマ語文献から成る。

ベトナム中国関係史の研究者山本達郎旧蔵書は、欧文諸言語による書籍のほか、中国語（漢籍を含む）およびベトナム・タイ・ビルマ語などの東南アジア諸言語による書籍、雑誌から成り、現在整理が進められている。山本文庫の越南本五八件はこれまで日本では見ることができなかった詩文集と祭文を含んでいる。また、従来系統的に収集してこなかった南アジア、東南アジア関係の和書を充実させた。

●南アジア

南アジアについては、世界的なヴェーダ学の専門家辻直四郎旧蔵の文学・宗教・言語学関係書籍約一万二〇〇〇点がある。辻文庫はヴェーダ学に関する欧文和文の一大資料群で、完全主義の姿勢が研究文献の蒐集整理にも反映していたものと思われる。これほどに充実したヴェーダ文献のコレクション

シオンを擁するものは稀という。

●西アジア

東洋文庫の中近東現地語資料の収集は一九五八年に始まる。国内で中近東の研究ができるようにという強い意志の下に開始されたもので、主として、アラビア語、ペルシャ語、トルコ語による図書によって構成されている。半世紀に及ぶ事業によってその意図は現在充分達成されており、東洋文庫の持つコレクションは膨大なものになりつつある。

イスラム革命関係小冊子類は、イスラム・イスラム革命成就前後の政治的混乱期に刊行された多種多様な出版物の現地収集コレクションである。

イスラム思想史の研究者岩見隆旧蔵のイスラム神学・哲学に関するコレクションは、現地で蒐集された一三〇〇点のペルシャ語資料、七〇〇点のアラビア語資料、そして四五〇点の欧文資料からなる。一九世紀に刊行の石版刷資料六〇点は貴重である。東洋文庫はわが国最大のイスラム関係文献を有しているが、岩見文庫を加えることによってその蔵書はさらに充実したといえる。

このほか、イラン現代の思想家アフマド・キヤスラヴィーの著書及び関係文献七八点を数える加賀谷コレクション（大阪外国語大学教授加賀谷寛旧蔵書、イスタンブールに所蔵されるオスマン語の主要年代記写



特集／アジア地域関連コレクション—わが国主要図書館の所蔵資料から

本のマイクロフィルムなども特筆すべきであろう。

平成一五年度新発足の超域アジア研究部門現代イスラーム班では、これまでほとんど利用されることのなかった中東諸国の議会文書に関する資料の充実に努めている。

●日本

日本関係の洋書は、戦前期には欧米人の日本研究書・見聞記の類を丹念に収集していたが現在では組織的に集めてはいない。

和書も系統的な収集に努めてはなかったが、藤井尚久蒐集の和漢洋医学関係資料約一五〇〇部（藤井文庫）、古河の河口家伝来の医書類写本コレクション、日独文化協会寄贈のフォトスタット版シーボルト文書等を挙げることができる。

開国一〇〇年記念文化事業会旧蔵日本関係資料は、図書およびマイクロフィルムによる一九・二〇世紀の日本についての政治・経済・軍事・外交・歴史・文学・宗教・社会等に関する文献の集成である。近代中国研究委員会収集資料とともに、東アジアの近・現代研究の基礎的資料群である。

●目録データベース

平成一八年一二月現在、東洋文庫ホームページ (<http://www.toyoko-bunko.or.jp/>) から利用可能な図書のオンライン検索を列挙すると、以下のようになる。

・中国語逐次刊行物、日本語逐次刊行物

・漢籍資料、續修四庫全書

・岩崎文庫（和書貴重書）

・欧文図書（中国の部・朝鮮の部・東南アジアの部・西アジア・北アフリカの部の他、一九九四年以降整理分、近代中国研究委員会収集欧文図書、榎文庫欧文図書、辻文庫欧文図書、モリソン二世文庫、ベラルデ文庫、モリソンパンフレット）

・別置ロシア語図書

・近代中国研究委員会収集中文図書

・韓国・朝鮮語図書

・モンゴル語資料

・河口慧海将来チベット蔵外文献

・トルコ系諸語（キルギス語・ウイグル語・カザフ語）資料

・ビルマ語図書

・インドネシア語・マレーシア語図書

・南アジア諸語（アラビア文字）図書

・スインディー語図書

・アラビア語図書、ペルシア語図書

・現代トルコ語図書、オスマントルコ語図書

・日本語図書（藤井文庫は別建て）

このほか、「香港銅版画・水彩画」や「中華帝国図等」（古地図）、「梅原考古資料」などの画像データベースも公開している。

以上、列挙することによりのみ汲々としてしまったが、これらの大収集がモリソン以来の多くの諸先人の大変な努力によって培われてきたことを想うと身の引き締まる思いである。このような貴重な資料は、現在を

生きる我々だけではなく将来の研究者にもその利用を保証する責任と役割がある。予算や人員での諸々の制約から思うようには進まないけれども、破損資料の修復や複製代替資料の作成など、資料保存についての地道な努力の積み重ねもまた必要である。そして、東洋文庫の図書館としての機能が学問の進歩と共に進歩するためには、図書資料をより充実させることである。東洋学研究に一層寄与してゆくことができるよう日々の務めに邁進したい。

（ちゅうぜんじ まこと／国立国会図書館支部東洋文庫）

《参考文献》

①榎一雄『東洋文庫の六十年』東洋文庫、一九七七年。

②小山勲『東洋文庫の蔵書とその保存』（『びぶろす』四三卷一一号、国立国会図書館、一九九二年一一月）。

③桜井由躬雄「山本達郎氏遺贈図書について」（『東洋文庫書報』三六号、二〇〇五年三月）。

④中見立夫「故神田信夫先生寄贈満洲関係文献・資料について」（『東洋文庫書報』三六号、二〇〇五年三月）。

⑤渡辺兼庸「これからの東洋文庫」（『国立国会図書館月報』三九四号、国立国会図書館、一九九四年一月）。